
サンシャイン 3 1 1

J . I . A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンシャイン311

【Nコード】

N2642Z

【作者名】

J・I・A

【あらすじ】

魔法文明の発達した異世界、その市民革命のまったただ中の時代。不思議な植物を拾った自警団員が異能に目覚め、《白の王》と名乗る魔族から街を守る。

エア（夏至）の2日、晴れ（前書き）

現代風の魔法文明を描く上で、封建制度が無くなる市民革命の過程が必要だと思ったので書いてみた。

あくまでエンターテイメント作品なので思想は日和見主義的、悪党と戦う俺TSUEEEEEEEE展開が基本なので注意。

エア（夏至）の2日、晴れ

ある夏の夜、テンニディルコンタルの上空を一匹の妖精が飛んでいた。

本名アルシーノニマクモニティ、通称シーノ。手のひらほどの体に昆虫の羽根を持つ、フェアリーと呼ばれる種族だ。

ときおり振り返っては、絶え間なく振動し続ける羽根越しに背後の様子を確認していた。

まだ追っ手は来ていない。彼女の二対の薄い羽根の向こうには、人間の街の明かりが延々と続いている。

大森林はとづくに地平線の向こうに遠のき、青い雲が天空と地上の間をさまよっているばかりである。

妖精族は月の満ち欠けによって魔力が著しく増減する。今日のような満月の夜でなければ、あの森から脱出することもできなかっただろう。

両手でぎゅっと包み込んだ宝物を、あふれ出る光を遮断するように力強く胸に押し付けた。

だがどんなに力強く押さえ込んだところで、強い光は彼女の手のひらの血管を透かすようにどくどくとあふれてくる。

「落ち着け、落ち着け……」

さしもの森の番人たちも、人間の領土まで逃げれば追ってこられるはずがない。

だが、それでも焦燥ばかりが彼女の胸を焦がしていた。

早くしないと、今にも手の中の『こいつ』が成長してしまいそうだった。実際、押さえ込んでいる手にはそれがむくむくと成長する反発力を感じていた。

硬い殻がぴりっと裂ける音や、きゅうつという鬱屈されたガスかなにかが隙間から漏れ出すような音も聞こえている。

いまにも彼女の繊毛のような細い指を押しつけ、外に飛び出そう

としているようであった。

「あわわっ、待てっ、待て！　いまは成長するな、もうちょっとだから待て！」

シーノがいくら呼びかけたところで、その宝物に耳はついていない。

それどころか眼も鼻も口もついていない、ただの植物の種である。けれどもこの植物には植物らしからぬ意思を感じる。まるで彼女から逃げようと抵抗しているような気さえた。

いや、そんなはずはない、落ち着け、手の汗を吸って成長が早まっただけだ。

そんな事を考えながら、背筋がすりそうになるくらい羽根を振り続けていると、ふいに彼女を照らしていた月明かりが途絶えた。

雲に遮断されたのではない、塔だ。《魔法使いの塔》が格子戸のように均一に並び、彼女に向かって強い影を投げかけていた。

その周囲に集まっている街の明かりは、計画的な精密さで配置された都市のものに変わっていた。

大都市の中に、八角形を描く巨大水路が二重三重に横たわっている。それらは闇夜に浮かび上がるほどくつきりと暗い直線を地上に描き、水底に並べられた青白い光を放つ魔石が怪しげな光の呪文を描いていた。

魔術によって栄えた中世の大国。魔法^{ゼフス}大国だ。

中央の山に鎮座する城が月明かりにぼんやりと浮かんでいた。ポルゼン。ゼフス城。白鳥城の別称を持つ東部アーディナルでも最大級の王城だった。

来た。とうとうゼフスまで逃げおおせた。よしあともう少し、とシーノが油断したところだった。

顔を手元に向けた瞬間、手の中央あたりから縮められた双葉が勢いよく飛び出して、彼女の顎をがっんと一発なぐりつけた。

「ぐわあっ！」

不意打ちを食らったシーノは大げさに仰け反って、そのまま空を

くるりと宙返りした。

幸いにも葉が柔らかかったので痛みはなかったが、さすが森の精サテモの至宝、植物のくせに抵抗を見せるとはじつに生意気である。なんとか落とさずにしつかりと手に握っていた植物を睨みつけて、シーノはおやっと目をむいた。

彼女が握っていたのは、種を覆っていた茶色い薄皮だけだったのだ。さつき双葉が生えたはずの中身が無い。

シーノはぴたりと空中に静止すると、延々と広がる街明かりを見下ろして、蒼白になった。

この状態で考えられる答えは一つ。あれだ、宙返りした拍子に中身がポロリと。

「ど、ど、ど、どうしよう……」

これはまずい。非常にまずい。探せるか。この街の中を。丸一日も経てば、あの植物は完全にこの地に根付いてしまはずだ。

それどころか下手をすると、この街が一日も持たずに消滅しているかもしれない。

謎の植物が落下したのは、《サンシャイン》という名の小さな通りであった。

通りには平凡な民家が軒を連ね、角に立っているパン屋の石壁に《サンシャイン通り311番地》という看板が掲げているのが目印だ。

朝にここを通りかかった旅人は、焼きたてのパンの香りと共にこの地名を覚えるのであろう。

妖精の落し物を最初に見つけたのは、通りをのっそのっそと歩いていた熊のような自警団の男であった。

親分、サンシャインの旦那、いろいろな呼び名を持っているが、いちおうロブロというのが本名だ。苗字はない。

ここエア地区はゼフスでも都心からずいぶん離れているため、王都で主流の自警団のスタイル、ヘルメットにサーベルと言った当世風の装備をしている訳ではなく、どちらかというところ森番とか狩人といった風体をしていた。

鹿皮をなめたブーツに、生地を何枚も重ねた丈夫な白いズボン。上半身にはエルフが身につけるような深い緑色のチュニツクを身に付け、肩から脛まで守る厚手の前掛けには、革の補強も兼ねて意匠を凝らした模様が縫いこまれている。

それらの上からこげ茶色のマントを羽織って、アーディナルの伝統的な狩人のスタイルが出来上がる。

腰には刀剣と呼ぶには短すぎる大ぶりのナイフを差し、肩には矢筒と弓をきちんと揃えて背負っていた。

齢十九にしてこの街の自警団長を務める事となったこの男は、雄牛二頭と重さが釣り合うインゴツトのような巨漢で、そこらの悪党どもなら睨みつけただけでたちまち怯んで逃げ出し、声を掛けられただけでぎゃんつと叫んで昇天しそうな威つい風貌をしていた。

しかし彼は元々自警団だったのではない。普段この町より田舎のさらに田舎の森に住んでおり、ときおり毛皮を売りに王都に訪れているただの狩人なのであった。

ところが偶然通りかかった街の代表者の会合に呼ばれた彼は、右から左から正面からワインをどんどん勧められて、いえ、自分は村に帰らなければなりませんし、お酒はそんなに飲めませんし、などと首を横に振っていたのだが、気がつけば完全に酔いつぶれてしまっていて、自警団の役割を唯々諾々と引き受けてしまっていた……らしいのである。

翌目を覚ました彼はびっくりして目が点になっていた。自警とというのはふつつ自分の住む場所を守るためのものである。

しかし、彼はいつの間にかこのサンシャイン通りに新しい住居を与えられ、あまつさえこの町の住人にされていたのである。

なにしろ時代が時代であった。七五〇年、東部アーディナルに革命の嵐が吹き荒れていた頃の話である。

ゼフス王国もいままさに反乱軍との壮絶な戦いを繰り広げており、魔法障壁によって外部から隔離されているこの王都のみがこうして平和な様相を保っていた。

しかし、魔法障壁の内部からも物騒な事件が頻発するようになってくると、各町が独自に自警団を結成し、交代で夜警をするようになっていたのだ。

このアイス＝ブルーム町もそれに倣って自警団を設置した町のひとつであるが、もし、本格的な戦闘になったら。

例えば、王都では一般人には所持が禁止されている銃や剣を持った敵が現れたら。

武器に認定されていないような短弓やナイフでそいつに立ち向かえというのは、かなり危険きわまりない話である。

要するに賢い町人たちは、その危ない役目を偶然通りかかった強そうな熊にむりやり押し付けたのだ。

賢い熊はそのことを知っていたが、もはやどうする事も出来ない。

こうして選ばれた熊のような自警団長は、つい今しがた空から落下してきたばかりの光る双葉の苗をじっと見下ろしていた。

空から落っこちてきたのを不思議に思っていると言うより、きつと今日は疲れているせいだろう、と思いつきそうとしているような、すでに諦念しきった感じのうかがえる顔つきであった。

ロブロはきよきよと辺りを見回すが、ここには魔法使いの塔の影もない。

家主が留守で長いこと締め切った二階の窓や、人気のない屋上の他は何ひとつ見当たらない。

この植物は一体どこから落ちてきたのだろうか？　ロブロには分からない。

ぼっかりと開けた夜空を見上げると、ついつられて彼の口もぼっ

かりと半開きになった。

自警団長は胸の肉に食い込んでいた皮帯を外し、矢筒と弓を丁寧に脇に置くと、熊のようにのっそりとした動作で植物の前にかみこんだ。

膝を汚さないように前掛けを使いながら、しゃがむのも一苦労しそうな巨体で器用にうづくまると、革の手袋の厚みで一回り巨大に膨らんだ手をそれに差し出した。

空から落ちてきた謎の苗はいかにも軟弱そうで、その気がなくともあつけなく潰してしまいそうである。

つぶしてしまわない様に、慎重に根ごとすくい上げる。

そうして両手の中に収めた苗を熊のようにじっくり観察した。

すでに大量の汗をかいており、立ち上がったときにはあふうと大きく息をしていた。

だが、立ち止まってはいられない。彼は光る苗を大事そうに抱え込み、自警団の詰め所がある方とは逆に通りを急いだ。

平和な夜に、人の助けを求める声ほどよく響くものはない。

自警団長ロブロは拳を振り上げ、力の限りドアをノックした。蝶番がぎし、ぎし、ぎしと悲鳴をあげる。

ようやく顔を出したのは、ロブロより頭二つ分背は低い、それでも背の高い部類に入る好青年である。

白いシャツは裾や胸元がはだけているが、不思議と不潔感はない。白みがかった金色の髪はしつとりと頭の形に張り付いており、寝癖もついていなかった。

小さな耳たぶのピアスが手元のランプ（落ち着いた白光を放つ魔石が入っている）の落ち着いた光を反射している。

「俺の睡眠を妨げるのはどこのどいつだ？」

「ああ、眠っているところすまない、また急患なんだ」
「またか？」

フランはかたく目を閉じ、目と眉と眉間の辺りで「業」の字を書いていた。

この青年、実は医者でもなんでもない。ただの花屋だ。

彼とロブロの出会いのきっかけは狐だった。

ちょうど彼の店の向かいにはロブロが薬草の類を買っている行きつけの店があった。

血を流してぐったりした狐を抱えたロブロは、その軒下を借りて治療を始めたのである。

王都で野生の狐など珍しいもので、店の前にはわんさと人ばかりが出来始めていた。

フランも商売どころではなくなったので、面白半分で様子を見にいったのである。

ロブロは狩人のくせにろくな薬草の知識もないらしく、傷口もろくに洗わず直に薬を塗ったりして、さらにその調合もひどく大雑把なものであった。

狐は涙を流しそうな眼をしてけんけん鳴いており、体は焼き魚みたいに戻り返っていた。

その狐を絞め殺しそうな勢いで包帯をぐるぐる巻き始めたものだから見ていられない。

ちよつとばかり薬草の知識があったフランが、見かねて治療に手を出してやった。

たったそれだけの縁だったが、なんの因果か数カ月後にこのサンシャイン通りの自警団になってしまったロブロは、その後も傷ついた野生動物を見掛ける度にフランを頼るようになったのである。

「あのね、何度も言っているけどなるべく夜には来ないでくれよ、花屋の朝は早いんだから」

「分かっている、患者が人だったら極力医者を頼るようにしているさ」

「そりゃご立派だね。じゃあ今度は何、シマリス？ それともウサギか？」

ロブロは、お椀型にした手の中でぐったりしている緑色の生物をそつと差し出した。

アニマル・キングダム
「動物界ですらねえのか……」

フランは気を失いかけたように、ぐったりと自分の腕によりかかった。

「お前はなんて可憐な少女だよ。そんなもん、適当に庭に埋めて水でもぶっかけときゃいいだろ」

「いや、種類がわからないからお前に聞きたいんだ」

「そんなもん辞典引いて調べるよ何のために公立図書館があるんだよ」

「少なくともこの辺りではぜんぜん見かけない種類なんだ。たぶん、輸入植物か魔法植物だろう」

眠たげなフランは眉をしかめて、ロブロの手の中に眠っている植物をじいっと見つめた。

ぐったりとしおれており、暗闇の中で、ぼうつと弱々しい光を放っている。

「な？ 見たことないだろう？ いずれにせよ貴重な植物だと思うんだが」

ふんふんと頷いていたフランは、ロブロの手の中からその苗をひよいとつまみあげると、なにやらポケットをごそごそと探り、中から細長い筒を取り出した。

それはライターだった。彼はとつぜん苗に火をつけ、ロブロはぎゃあつと悲鳴をあげた。

「俺の、凶鑑に、載っていない花なんぞ、みんな燃えちまえばいいっ！」

「やめろ！ フラン！ やめるんだ！ ぎゃああつ！」

激昂するフランとの格闘の末、ロブロはようやく彼から植木鉢と腐葉土を手に入れることに成功した。

危つく全焼を免れた苗は、その中央にちよこんと植えつけられた。フランは肩でせえせえ息を切らして言った。

「ロブ、お前は、魔法植物を甘く見ている」彼は額の汗をぬぐってロブロに言った。「ほうつておくと一体何が起こるか分からない。並外れた適応能力でどんどん繁殖して、その地域の生態系に甚大な影響を与えるんだ。ひよつとすると反乱軍がこの町に仕掛けた《生物兵器》だという可能性だってある」

反乱軍の名を出されると、ロブロはいつも悲しい気持ちになった。この国では悪人のように言われている彼らであるが、魔法障壁の外からやってきたロブロには、彼らの中に数名の知人がいた。

知人達は彼の知る限りむやみに人を傷つけない、心根の強い奴らばかりであったが、王都に入ってくる情報は彼らの悪い噂ばかりで、関係の無い一般市民に対する略奪や破壊活動も頻繁に行われていると聞いて、ロブロはひどく驚いたものだ。

反乱軍の活動は名目上、貧困にあえぐ民衆を救済することだとも聞いている。

実際にどのような事が行われているのか彼には知りようがないのだが、少なくとも、今日まで生物兵器を街に放つようなそんな破壊行為はしてこなかった筈である。

「生物兵器なんかであるものか。ひよつとしたら、ただの遺失物ということだってありうる。輸入品だとか、魔法使いの塔で作られた新種だとか」

仲間たちを信じていたロブロは、別の可能性も示唆した。

「それに生物兵器だとして、国王軍が作ったものかもしれないじゃないか」

「だった、なおさら燃やすべきだ。そんなもん、根絶やしにしちまえ」

フランは目を怒らせ、冷たい声で断言した。

この青年はどっちの味方なのだろう。恐らく、どっちも同じくらい信用していないというのが正しいのだろう。

「ロボ、俺の嫌な予感はあるんだ。そいつはろくな植物じゃない。花屋の勘を信じる。絶対に、今からでも遅くないからそいつを燃やすんだ。わかったな」

そうは言われたものの、ロボロはむやみに動植物を傷つけたりすることのできない、心優しい狩人なのであった。

自警団の本部に戻ると、鉢植えを窓辺にそつと設置し、なるべく日が当たるように鉢の位置を調節した。

手袋を脱いで、イモムシのような太い指で葉に触れてみる。幸いにも葉の一枚が焼け焦げただけで、それほど重症には至っていない。傷の深さを確認し終えて指をどけると、茎は寒そうにぶると振るえ、そのさい燐光がぱつと辺りに散った。

コップの水をたっぷり注いでやると、土の中からじゅごおおおという威勢のいい音が聞こえてきて、たっぷり注いだはずの土は見る間に乾いていった。

ロボロの目の前で茎はぐんぐん成長し、双葉の脇から、ぽんつという音さえ聞こえてきそうな勢いで三枚目の葉っぱが飛び出した。

ロボロは思わず微笑んだ。これは害の無い植物だ。間違いない。そう確信して、彼はベッドに入ったのだった。

エア（夏至）の3日、晴れ

その日、ロブロは彼が発見した植物が魔法兵器ではなく、ただの珍しい植物であるということを証明するべく、早朝から聞き込みに戻っていた。

店一軒一軒をまわって、外国の植物を仕入れた事はないか、あるいは、そういった植物を持っていそうな人はいないかなど聞いて回ったが、どれも空振りのようであった。

最後にロブロはサンシャイン通りの奥まったところにある、丘の上に住つ豪邸を訪ねてみた。

この家に近寄るのはためられる。なんせ主人が夜中に家から飛び出してきて、ロブロに相談を持ちかけた事があるのだ。

いわく、俺は妻に殺される、家に乗っ取られる、と。そのエンゼル夫人は国外の珍しい輸入品を収集している好事家で、ひよつとすると彼女なら知っている可能性もある。

ドロドロした家庭の事情など微塵も感じさせない、植え込みもどこかおとぎの世界のようなメルヘンチックな庭園を横切り、玄関の真っ白い柱に阻まれながら呼び鈴を鳴らしてみた。

間もなく、ドアノブががちゃっと下がった。

しかし、ノブが下がっただけで何も起こらない。しばらく待っていると、ドアが少しだけ開き、イタチのようにしゅるりと人がすべり出てきた。

片手にワイングラスを持ち、肩と胸の大きさはだけた紺色のドレスに身を包んだ、どことなく危なっかしい雰囲気的女性だった。

顔は小さく、その造形には口元のホクロから小さな鼻に至るまで、磨き抜かれたような美しさが漂っている。

髪色と同じで尖った印象を受ける銀色の目でロブロを見上げると、にこりともせず言った。

「あら、どこの熊かと思ったら親分じゃない」

「こんにちは」

ロボロは帽子を取って礼をした。

「あの、リサを呼んでくれませんかでしょうか」

エンセル夫人は形のよい顎をついと上げ、なまめかしい視線を保ったままだ。

この夫人は苦手である。正直、彼女が直接出てくるとは思っていなかったロボロは冷や汗をかいていた。

「リサですか？」

「彼女に二、三、聞きたい事がありました」

そう言うと、エンセル夫人のこめかみがぴくりと動いた。

「まあ、彼女がまたなにか、粗相を？」

「いえいえ、とんでもない」

ぶんぶん首を振って否定した。

リサはこの家に仕えている侍女である。毎朝丘の上から市場まで食材を買いに出かけ、看板のあるパン屋で必ずパンを買って帰る。

本部の前を通るときは必ず挨拶をしてくれる。人付き合いのよい女性なので、ロボロとも仲がよいのだった。

「どう言っているのか悩みながら、ひとつひとつ慎重に言った。

「昨晩にですね、通りの方でちよつとした遺失物……あ、いえ、ちよつとした『事件』がありました。彼女なら、夕方ごろあそこを通

ったのではないかと思って、詳しい話を聞きたいんです」

エンセル夫人は黒いマニキュアを縫った爪で唇にくぼみを作り、じいっとロボロの顔を見ていた。

相談しに来た彼女の主人によると、彼女の銀色の目はどんな些細な嘘でもすぐに見破ってしまうという。

ロボロは必死で笑顔を取り繕っていたが、ばれているかも知れない。

足の内側を擦るような歩行法を使って、知らないうちにどんどんロボロの目の前に近づいてくる。

「リサには今、用事を申し付けておりますの。私の方から、伺って

おきましようか？」

「あ、い、いえ、大した用事ではないので、居ないのならまた別の機会に」

「せっかく暑い中おいでになられたのですから、冷たいお飲み物でもいかが？」

「せっかくですが、今は見回りの途中ですので、できればまた夜警の時にでも」

「そう」

残念そうな顔をした夫人は、ロブロの手にそつと触れると、長い爪で手の甲をかりかりと引っかいていた。

「じゃあ、それまで一人ぼっち？」

やはりこの夫人は苦手だ。

「あの、リサがいないのなら、この辺でお暇させていただきたいのですが。構いませんか？」

夫人は真顔になってふつと体を離すと、ロブロの顔をまじまじと見つめた。

相変わらず表情を押し殺した仮面のような顔だったが、冷徹さの中に怒りがにじみ出ている、極めて恐ろしい表情のように思えた。

「いえ、居りますわ。……少々お待ちを」

彼女はその場に強烈な香水の香りを残して、屋内に姿を消した。その際にロブロは軽くむせた。

リサはどうやらすぐそこに居たらしい、夫人とほとんど行き違いにエプロン姿の侍女が姿を現した。

リサは血相を変えて飛び出してきて、親分のどてつぱらに突き当たった。

「ご、ごめんなさい、すみません、申し訳ございません。親分、ところで、あの、今日は何の御用でしょうか？」

ようやく本題の話ができそうだった。中の夫人に聞こえないよう、ロブロは声を潜めて言った。

「実は昨晚、本部の前で遺失物を見つけてね。珍しい植物だったか

ら、夫人が収集しているものの一部ではないかと思つて」

リサは当惑した様子で、ぽかんとロボロを見上げた。

「だったら、私よりも夫人に直接お話をなさった方が……あ、そうですね、私がおつちよこちよいだから落としたかもしれないと、わ、私が落とすはずが無いじゃないですかっ！ 失敬なっ！」

両手の拳をぎゅっと握つて、真つ赤な顔を突き出してくる。

いつも何か失敗をやらかしては夫人にお目こぼしを貰っているのだが、本人は至つてこの調子である。

「か、可能性の話だよ」ロボロは両手を広げて彼女を制した。「万が一、そうだったら困っている所だろうな、と思つてね。聞くところによると、夫人はいつも君に辛く当たっているそうじゃないか？」
「うっ……!!」

「だから、気づかれない内にこつそり解決しておこうかと……」

ロボロが片目をつぶつて見せると、リサは両手で茶色い頭をがっしと掴み、「なんて事をしてくれた」と叫びだしそうな顔をして、すばやくドアの中を確認した。

夫人が階段の方から、冷たい目でじろりと二人の様子を見ていた。それを確認すると、彼女は困り果てた様子で、ほとんど幼児が暴れるみたいに手足をばたばたさせてスカート裾をはいた。

「あなた、本当に、どうして私が奥様に辛く当たられているのか、ご存じないのですか！」

ロボロは不意打ちを食らったように目を丸くした。彼なりに思い悩んでみたが、そんな理由が熊に分かるはずもない。

「どうしてだい？」

「どうしてって……」

リサはドアと親分を十秒間に十数回も見比べ、顔を真つ赤にして髪をかきむしった。

「もう、そんなことを、言ったら、それこそ私が殺されてしまいます！ つい最近、屋敷に植物を仕入れた記憶はございませんし、そもそも奥様の輸入品を私が屋外に持ち出したりなどいたしません！」

念のため、盗難品がないか在庫を調べますので、見つかり次第、折り返し連絡いたします！ これでいいですね！？」

もうこれで用は済んだか、と言わんばかりに胸を張って段取りを決めてしまうと、ロボロのマントをぐいと引つ張り、ナイフを抱え込むように体を丸めた姿勢になって、小声で脅すように言った。

「ですから、親分。お茶でも上がってゆかれませんか？」

なぜだろう、何か切迫した表情で、恐ろしいくらい真剣なまなざしを向けられている。

なぜそんなに必死なのか。寄らないとそんなに困るのか。柱の間に挟まって身動きが取れないロボロは、ごくりと喉を鳴らした。

「い、いや。まだ勤務中だから……あとで寄るよ。ありがとう」

口惜しそうに手が離されて、ロボロはゆっくりと柱の間から遠ざかっていった。

リサの悲痛なまなざしがロボロをじっと追いかけていた。まるで見捨てられる子猫のような目だった。

挨拶もそこそこに、ロボロは乱れたマントを着なおすと、一目散に屋敷を退散した。

急ぎ足で庭園を抜け、門に差し掛かったあたりで、屋敷の方から盛大に食器の割れる音がした。

ガチャーン。バリーン。

それに続いて、リサらしき女性の泣き声も聞こえてきた。

またか。おっちょこちょいな娘だ。これもこの屋敷ではいつもの事である。

ロボロは肩をすくめて、夜警のときの事を考えながら門から出て行った。

結局、その日は例の植物の落とし主に関する有力な情報を得る事はできなかった。

疲れた顔で本部に戻ったロボロを、ささやかな花束くらいに成長した植物が待ち構えていた。

「ははは、どんどん成長していくなお前は」

窓を開けてやると、水を催促するようにわさわさと葉を動かしている気がした。もちろん風で揺れているだけなのだが。

こうやって成長していく姿を目の当たりにすると、不思議と植物にも愛着がわいてくるものである。

フランに貰ったじょうろで水をやっている、彼に続いて若者が自警団本部に帰還してきた。

ぼさぼさの髪に無精ひげ、肌の色は浅黒く、いかにもストリート育ちといった青年だ。

いつもジャンパーのポケットに左手を突っ込んでいるが、理由を聞くと、いつ敵に襲われるか知れないから、用心のためにナイフを握っているのだという。

がに股に歩くのも、右にも左にも逃げられるようにだという。むつつりと何か考え込んでいるような顔をしており、彼の背筋が真っ直ぐになったところを見た事がない。

口はへの字に曲がっているが、ロボロの前ではいつも歯並びの悪い口を開いてへらへらと笑っていた。

「あ、親分。お帰りでしたか？」

「ステファン。どうだった？」

青年は一瞬考える振りをして、ああーと口ごもりつつ、親指で鼻をきゅっと押さえた。

あまりいい成果は期待できなさそうな雰囲気だ。

「もうちょっと、なんですがね」

もうちょっとだ、もうちょっとで何かが起こる。そういう口ぶりだったが、どうせ仕事をサボってカジノにでも行っていたに違いない。

ステファンはいわゆる不良だった。だが、根っからの悪人というわけではなかった。

ただ強い者にくっついてブラブラしていただけのだらしのない青年で、以前までは闇の世界の悪人に付き従っていた単なる下っ端

だった。

しかし、ゼフスの情勢が荒れてきた昨今、闇の世界の方も色々大変らしく、ステファンの周囲にも次第に血なまぐさい事件が付きまとってくるようになり、途中で怖くなつて逃げてきたのだそうだ。彼を追いかけてきたメンバーに町中で掴まってしまい、あわや制裁を受けそうになっていたところに突如現れ、彼らをひと睨みで退散させてしまったすごい男がいた。

それがロブロであった。

彼はそのとき、ちょうど怪我を負った狐を担いで医者の間を右往左往していたところであった。

全身に狐の返り血を大量に浴びており、しかもどの医者もとりあつてくれずにイライラしていた。

背中から逆光を浴びていたため、発汗した皮膚から立ち昇る湯気がくつきりと浮かび上がり、今しがた人を殺めてきた殺戮者のようなオーラをまとっていたそうだった。

「まだだ、まだ足りない！」

といった貪るような目つきで彼らを見下ろしており、もし足を折つていなければ彼も逃げていたと、ステファンは後に語った。

それ以後、ステファンは片足を引きずりながらロブロの周りをうろちよるとついて回る子分になった。

「気をつけな、うちの親分は夜になると手ごろな木を素手でへし折つて家に持ち帰り、素手でむしりながら火にくべるのが森での日課だった男だぜ？」

「へっ、そんな悪党がなんだってんだ。親分は自警団に就任したその日、すでに十五人を殺していたぜ？」

「もうちよつとまけるよ、親分は一日に熊一頭は平らげないと食つた気がしないお方だからな」

恐らく本人が聞いたらきつと目をむくはずのロブロ伝説を吹聴してまわっていた。

子分を名乗ってはいるが自警団の正式なメンバーになる気はないらしい。

どっちつかずの青年で、今回みたいに「珍しい植物が落ちていたので落とし主を探して欲しい」などというあまり価値のなさそうな仕事は適当にサボってしまう。

けれども人命がかかっているような急を要する事態だと、ロボロにはとても出せないような脚力を発揮して町中を駆け回ってくれる。彼以外メンバーのいない自警団には貴重な人材である。その気になっただけならばいつかは真面目に働いてくれるだろうと信じていた。ロボロは財布の紐を解くと、それほどない賃金から銀貨を一枚抜き取り、今週分のお駄賃として渡した。

「また頼む」

ステファンは、へっへつと卑屈な笑みを浮かべて銀貨を受け取り、ジャンパーのポケットに突っ込んでそそくさと退散していった。

今日はひどくくたびれてしまった、窓辺の植物だけがこの街の癒しである。

ロボロは葉っぱを撫でて、探さなければ見つからないくらいになった小さな火傷の跡を確認し、日誌をぱらぱらとめくってみる。

日誌には日付と太陽、あるいは雲の記号しか書かれていない。彼はまだ字が書けなかった。

今日の日付と太陽の記号を日誌に書き込むと、彼は日が暮れるまで読み書きの勉強をするのだった。

日が落ちると同時にロボロはカンテラを持ち、狩人の装いになった。

玄関先に置いてあった弓と矢筒を肩に背負うと、再び夜警に繰り出す。

自警団本部は町民会議が行われる公民館の二階、もとは物置だっ

た場所を改装した大きな部屋で、ロボロが出てゆくと物音ひとつしなくなる。

しんと静まり返った室内で、この街の史料などを並べた本棚の間からきよるきよると辺りの様子を伺っている者がいた。

二対の羽根を音もなく羽ばたかせ、軽々と空を飛ぶ。妖精である。

会議用のテーブルやソファの上を光の尾を引きながら飛び、窓辺の植物の葉群に飛び込むと、彼女は身を潜め、じつと窓の外の様子を伺った。

一階の戸をばたんと閉じる音や、ちゃらちゃらと鍵を鳴らす音。

カンテラの光がのっそりのっそりと通りを歩んでゆく姿が確認されると、妖精はふうと息をついた。

「よーやく見つけたぜ……」

予想以上にてこずってしまっただが、どうやら彼女が落としてしまった植物は無事な様子である。

適当にその事を確認すると、早速根元に飛びつき、鉢から引き抜きにかかった。

「こいつ、たった二日でこんなに成長しちまいやがって……おまけに可愛い鉢にまで植えられちまって、魔法植物の王がなんとまあ」
根っこを引っ張ってうんうん唸っていると、植物はまたしても抵抗を見せた。

今度は妖精の背中にぼとりと冷たい何かが落ちてきた。

さらにそれは服の中の手が届かない位置で、無数の髭のような手をわしわしと動かし始めたのである。

妖精は背中側の全筋肉を収縮させて飛び上がり、はずみで茎に膝をぶつけて悶絶した。

地面に落ちた鳥が痙攣するように羽根を俊敏にはためかせた。

格闘の末どうにか取り出してみると、テントウムシである。アブラムシから植物を護る愛らしい鉢植えの騎士だった。

こぶし大のテントウムシが彼女の手の平にうずくまり、顔を真っ

赤にした妖精をあざ笑うかのように顎をもそもそと動かしていた。

妖精は顔を紅潮させて、波打った短い金髪をさらにくしゃくしゃに乱し、怒りに震えながらテントウムシを指差した。

「て、て、てめえっ……昆虫の分際でアルシーノ＝マクモニティ様に齒向かうとはいいい度胸じゃねえかつ！」

この俺を誰だと思つてやがる、いつまでもそんな余裕たつぷりの面白いツラをしていられると思うな！」

テントウムシは背中中の甲羅をぱかっと開いて、あたかも挑発するかのようにその派手な模様を見せびらかした。

さらにその下に格納されていた長く茶色い羽根を高速で動かして、彼女の手の平から飛び去っていった。

ゆっくりとその場に立ち上がったシーノは、あえてテントウムシの後を追うこともしなかった。追う必要も無いのだ。

彼女は妖精族が共通して扱える《光魔法》を駆使し、暗闇のどこかに消えてしまったテントウムシの気配を察知する事が出来る。

シーノは人さし指を真っ直ぐ闇に伸ばした。そして、次に自分の足元を指し示した。

「戻ってこい、虫イ！」

彼女が指を振つて命令すると、やがて暗闇からぶつぶつという不安定な羽音を響かせながら、テントウムシが飛んできた。

なぜか後ろ向きに飛んできた。後ろに引つ張ろうとする強靱な力に抗っているかのようなのである。

とつとつ観念したように抗うことをやめ、真っ直ぐすーっと後ろ向きに飛んできたテントウムシを、シーノは両手を広げてお腹の辺りでキャッチした。

土の上にねじ伏せ、鉢の上で取っ組み合いのけんかを始めた。

テントウムシは後ろ羽根をたたむのも忘れたまま甲羅を閉じ、慌てて防御の姿勢に入った。

「こいつめ！ こいつめ！ 思い知ったか、このっ！」

甲羅をばしばし叩いて懲らしめていると、上からさらにもう一匹

のテントウムシが落ちてきて、シーノはもう一度土の上にひっくりかえった。

「二人がかりだとっ……ひっ、卑怯だぞっ！」

一匹の妖精が二匹のテントウムシと乱闘に夢中になっていると、いきなり強い光が彼女とテントウムシを照らし出した。

ふと顔を上げると、カンテラの強烈な光の向こうに熊のように大きな男の顔が浮かび上がっていた。

この部屋の主、ロブロである。真下から光を浴びたその顔は驚愕に固まっており、暗闇でさらに不気味さを増していた。

「……………何者だ、一体どこから入った、いや、それ以前にこれは果たして現実なのか。はたまた俺が見ている夢なのか、

どっちでもいい、今すぐに消えてくれ、そうしたらぜんぶ俺の幻だったと思いなすから。

それ以外の答えは今、精神的に受け付けられそうにないんだ、頼むからお願いだ至急的かつ速やかに消えてくれ。

なぜだ、どうして消えてくれないんだ、夢か、ははん、俺は疲れて夢を見ているのだな。

さすがに俺も働きすぎかもしれん、休憩時間ぐらい休んだ方がいいかもな。

しかるにこれは一体どんな精神状態を示唆する夢なのであろうか？ ふむ、こんどは夢占いに興味がわいてきたぞ。

しかしなんと形容しがたい夢だな、これは。第一、こいつはいつたい……………何をやっている？」

妖精は二匹のテントウムシに馬乗りになりながら、口を丸く開いて、何か言い訳を探すようにぱくぱく口を動かしていた。

まさか、この木を盗み出そうとして木から抵抗を受けたなどという事は言えない。

どんな言い訳をしたところで、この熊のような男には通用しそうになかった。

「俺？ 俺か、俺は、この木を、護ろうとしていた、ただの通りす

がりの優しい妖精だよ。いや、違くて、俺は……そう、木の精霊」
熊のような男は、実際なんと言われようとも同じ反応を示したに
違いなかったのであるが、怪談話を聞くような慎重な目つきをして
いた。

言葉のひとつひとつをかみ締めるようにそうか、そうか、よしよ
し、うんうんなどと頷き、この突拍子もない夢に隠された自分の深
層心理に思いをめぐらせていた。

「そうか、ご苦労」

男が目の上に片手を掲げて敬礼すると、木の精霊になりすました
妖精もびくびくしながら目の上に片手を掲げ、敬礼を返した。

「う、ご苦労」

ロブロはぐるりと向きをかえて、カンテラを机の上に置くと、そ
のまま備え付けの簡易ベッドの上に横たわった。

スプリングが「ぐぎゃーっ、こんな重いものはいまだかつて経験
したことがないわー」のぐぎゃーっに相当する悲鳴をあげつつ、ど
こまでも沈む込もうとするその巨体をなんとか支えきった。

ロブロは植物に背中を向けて寝転び、そのまま朝が来るのを切実
に待った。

「……なあ、おっさん、頼むから下で寝てくれよ。そこに居られる
と、あの、邪魔なだけだよ。色々」

というシーノの切実な願いも意識の外に遮断し、ただひたすら深
い眠りの世界をロブロは目指すのだった。

エア（夏至）の4日、???

東部で最も美しいと褒め称えられる白鳥城の地下には鍾乳洞が広がっており、おどろおどろしい《魔物》をかたどった彫像が所狭しと並べられている。

異教の神殿を思わせる広間の壁には、彼ら魔物たちを人間の領土から駆逐したという英雄テルシオ^{II}デル^{II}セトの物語がずらりと描かれており、その最奥には、彼の相棒の白竜を象った玉座が悠然とそびえている。

その白竜の腹に顔を押し付けるようにして、がたがたと震えるやせっぱちの青年が居た。

見るからに病弱で幽霊に怯えるようにおどおどしているが、彼こそは、現在魔法大国ゼフスの頂点に君臨する大王、レオノールド^{II}ウインベール^{II}ゼフス^{II}ケイオン十一世その人であった。

彼は東部の天才作曲家がテルシオ伝説を元に生み出した歌劇に傾倒し、あまりの熱愛ぶりに城の地下に劇場を設けて連日ひとりで鑑賞していたほどのファンであった。

時に頬を赤らめて拍手を捧げ、時に青ざめて息を飲み、四日に渡って演じられる劇の台詞を今ではすべて諳んじることが出来るテルシオ・オタになっていた。

そしてこの歌劇さえなければ市民革命は起こらなかつただろうとさえ言われている通り、王が城の地下で歌劇を鑑賞している間、治世は放つたらかしくなっていた。

地上では王侯貴族が好き放題に暴れまわり、王は連日のように歌劇に没頭。

もはやこの王には任せて置けぬと魔法国家ゼフスに募った優秀な魔法使いたちがコミュニオン（経済共同体）を結成し、郊外の農民達を率いて領主に対して武装蜂起した。

それが反乱軍のはじまりであった。

そしてこのコミュニケーションが提唱する民主主義思想にいまや多くの人民が共鳴し、東部全域で市民革命が巻き起こる事態にまで発展していたのである。

そしてこのときこの王が取った行動は、まさに空前絶後であった。何を血迷ったか、さらに莫大な税金をつぎ込んで、この夢のテルシオ・ミュージアム宮殿を城の地下に築いたのである。

このまさかの愚行に、彼を信じて辛抱強く諭し続けていた先代からの家臣でさえ絶句。唯一頼れる彼らは王の気づかぬ間に家財を持てるだけ持って城から離散していた。

後に残ったのは魔法障壁に守られた王都と十名に満たない家臣と百万ほどの兵士、そして城の地下の歌劇だけとなってしまうた。

なにただのテロだろうせすぐに鎮圧されるさと高をくくっていた革命はもはや歯止めが利かなくなり、魔法障壁の一步外は火の海と化していた。

もうだめだ。このままではだめだ。だめだ、だめだと自覚してはいたのだが、自覚していたからといって、何をすればいいのかはと自然に分かるようになるわけではない。

残った家臣たちのアイデアは実に凡庸、退屈で、その場しのぎのものばかり。なんら根本的な解決にはならないような気がする。

「おおドラゴン……白き翼と白き魔力をたたえたドラゴンよ……世と契約を結びたまえ」

とつとつ外界からの騒音を遮断したケイオン青年は、ドラゴンの腹につづくまり、なんかこう自分にも英雄的な力が沸き起こるんじゃないか的な奇跡を夢想する日々を送っていた。

「世にその大いなる力を貸し与えよ……そして、そして共にこの戦乱の世を治めるのだ……！」

言い知れぬ不安に襲われた時、ケイオン十世はぶるぶると震えだし、ドラゴンの玉座にすがりついた。

そして目にはめ込まれたエメラルドの瞳の輝きを見つめ、より一層深く自分の殻に引きこもるのであった。

『よかるう、お前は既に三度この私に契約を求めたのだ』
するとドラゴンは緑色の瞳をきらりと輝かせ、こう返事をする。

『我が永遠の魂はお前の永遠の魂とひとつになり、千年の世にわたってお前の一族を守護するであろう』

もちろんケイオン十世の独り言である。彼は恐る恐るドラゴンのエメラルド・グリーンの瞳に触れてみた。

「……………ぐわああああっ！ おわあああああっ！」
突然、電気が走ったかのような衝撃が走り、王は飛び上がって胸をかきむしった。

暫くもがき苦しんでいた彼は、あるときふと、自分の中に目覚めた不思議な力を自覚するのである。

「おお……………おお、おお！」

手の平を見つめると、じんわりと温かみを帯びている。

「力だ。力が溢れてくる！ ああ、見える、見えるぞ！ 見晴らす限りのカルゼチバンの山々、ユーコルギアの高原、あれは私が生まれた森だ、そして我が故郷！」

彼は《千里眼》を手に入れたことを確信し、歓喜の声を上げようとす。

だが、ふと遠くを見詰めて愕然とし、反対に恐怖に青ざめるのだった。

「見える、見えるぞ。……………何ということだ、これが、世界か。……………何という、おぞましい姿。闇の世界の魔物が跋扈し、地上の人々を苦しめている。

ああ、やめろ！ 苦しみにあえぐ人々は互いに不信を抱き、盲目的に争いを繰り返している！ 彼らはまったく真実が見えないのか！

『そうだ、それこそこの世界だ』ドラゴンはゆっくりと呟いた。

「そうか、お前はいままでこのような人間の世界を見てきたのか……………。この混沌とした世界の全てを、我が脳は真鍮のように明らかに捉えている。

そして今ようやく分かったぞ、ドラゴン、人間を呪われた種族だと見放したお前の諦観が、嘆きが……そして怒りが、魂を分かち合った我の中に息づいているのを！」

ケイオン十一世は苦しみの鎖に打たれるように身をこわばらせた。だが、それに抗うように拳を空高く突き上げ、そして誓いの言葉を立てるのだ。

「違うのだ。信じてくれ、ドラゴン。これは、かようなものは我々人間の本来の姿ではないのだ……！」

彼らはいつ終わるとも知れぬ争いの中で恐怖して、今は獣の仮面を被って怯えて過ごしているに過ぎないのだ……！

見よ、そなたにも見えるであろう……盗人が家族の前でのみ見せる、安らいだ表情を。

見よ！ 人に見られぬところで涙を流す、血塗られた戦士の顔を！ 平穩の中に息づき、仮面を外したときこそ、人々は本当の心を取り戻す事が出来る。

信じてくれ、その姿こそ、その姿の方こそが人間の本当の姿なのだという事を……！

我は、ここに誓おう、ドラゴンよ、汝の力をもってこの世に平定をもたらし、本当の人間のみが息づく国を創造することを。

我が命の尽きんとも、千年の魂を賭して、この世界のあまねく人間のかつての姿を取り戻してみせる……！」

彼は歓喜に打ち震え、快活な雄たけびを上げ、ドラゴンの背から飛び降りた。

「行けえええーっ！ ドラゴン！」

疾風のごとく大広間の内側をぐるぐると駆け巡ると、壁に記されたその後百年に及ぶ邪悪な魔物たちとの戦いが、彼の外側で目まぐるしく展開していった。

そのとき、彼の進行方向、広間の隅の方にひっそりと立っている不審な人影を見つけ、ケイオン十世はぎゃっと叫び声を上げた。

英雄の気概は一瞬で消えうせ、へなへなと及び腰になった王は、

一目散にドラゴンの玉座へと駆け出していった。

「た、た、誰ぞ！」

ドラゴンの腹に卵のようにうずくまって、そこからほとんど掠れるような声をあげる。

不審な人影は、棒のように垂直にたたずんでいた。ひどくほっそりとしていて、立っているのが不思議なくらいである。

紫色のローブに身を包み、顔には平坦な楕円形の仮面を被っている。中央に真っ直ぐで強そうな鼻柱が描かれ、T字に左右に伸びた眉の下に、満月のような大きな丸い目が二つ。簡潔な、まるで抽象画のような面だった。

「力が望みですかえ？」

がたがたと震える王の脳裏に、《魔女》の文字が浮かび上がった。仮面でくぐもってはいるが、女の声のように高い声であった。

だが、性別が分かったからと言ってこの王にどうする事もできないのだが。

「我らは西方より来たりし古の魔族の末裔、《白の主》^{しやうのぬし}。汝が祖先、《東の王》^{あづまのわう}に救われ、命からがら白竜の手から逃れ、その後千年の世を生き延びた一族にござりまする……」

魔族？ 白の主？ 東の王？ 不思議な単語を使う者だったが、家臣たちが使う単語よりも、この王にとってはとても親近感がわいた。

「白の……主？ まさか、お前は魔族の末裔だというのか？」

ケイオン十世はドラゴンの肩を掴んで立ち上がり、よいしょと手探りで尻尾に掴まって立ち上がった。

テルシオによって駆逐されたはずのアーディナルの魔族の生き残り。それが今、目の前にいるとは。

予想とは少し違った形ではあったが、ケイオン十世はようやく訪れた自分のパワーアップ・イベントに、恐れおののきながらも興味を示さずにはいらなかった。

「して、その白の主が、我に、東の王に、力を与えるとな？」

仮面の魔女は首肯さえしない。まったく絵のように動かずに答えた。

「汝がお望みとあらば……。我が一族、汝ら王族の盾となりて戦う決意をしております」

ケイオン十世は、体中の血液が熱く、沸騰してくるのを感じた。

「力ああああ！」

地下にミュージアムまで作って英雄を奉っていた苦労が、とうとう報われたような気がした。

そう、ドラゴンと千年の契りを交わしたイーサファルトの王族と同じく、ゼフスの王族にもまた千年の契りを交わした魔物の一族が居たのだ。

なんという、奇跡！　そしてなんという、おろかな間違いをしていたのだろう。

「そうだ私は西部の竜の王などではない、東部の魔族の王だったのだ！」

ケイオン十世は突然、高らかに笑い声を上げた。仮面の魔女も一瞬身じろぎした様子である。

彼はカザーフ島に巢食っていたとされる三つ目の猛牛の石像に歩み寄ると、逞しい腕に持つ剣を取って空に掲げた。

あたかもこの日の為に訓練されてきたかのような勇ましいポーズを取り、そして歌劇の一節を口ずさむ。

「同胞よ、戦いを止めて、東の空を見るがよい。あの朝は、我らが何をしていようと必ずここへやってくる。アーディナルの栄光の夜明けである。」

地上でいかなる悲劇が起こっていようとも、あの光はまもなく大地に降り注ぐのだ。ならば兄弟よ、争いを止めて、ただ東の空を見ているがよい。

目の見えるものは前に来い、口の利けるものは永久に語るがよい！　我らの王が、再び現れたのだ！」

ドラゴンの背中に立ったケイオン十世は、感極まって涙をこぼし

そうなほど震えていた。

壁に描かれたドラゴン・ライダーの戦いの図が、今は英雄に立ち向かった魔族の勇姿を称える慰霊碑にさえ見えてくるから不思議だ。

「お前達は、今日から我が同士である」

ケイオン十世は剣を降ろすと、背中越しに仮面の魔女に言った。

「今日からは、『王』の名を冠するのだ。《白の王》^{じゆうおう}と名乗るがよい」

魔女は、仮面の向こうでくすりと笑ったようであった。やはり、絵のように身じろぎ一つしなかった。

「ふ、仰せのままに、東の王」

エア（夏至）の5日、曇り

『自称』木の精霊、シーノの背丈は人さし指と変わらないほど。

葉っぱの繊維を編みこんだと思われる、きめの細やかなドレスから、ほとんど骨と皮しかないのではないかと思うほど細くて華奢な手足が伸びている。

たとえこの比率を保ったまま体が大きくなつたとしても、女性というより少女のように小ぶりで華奢な人物になる事が伺えた。

「ただいま」

ロブロが朝の巡回を終えて自警団本部に戻ると、開け放たれた窓から差し込む光を受け、すっかり苗木らしくなってきた植物がわっさわっさと揺れていた。

シーノは揺れる葉群のベッドにねそべって、ふて腐れた顔を浮かべていた。

整った顔の中で一際目をひくのは、瞼だ。虹彩と瞳の色の区別がつかない大きな目もそうだが、ロブロは、これほどまでに盛り上がってくつきりとした瞼を見た事がない。

ほのかに緑がかつた目は常に不機嫌そうに細められていて、その上の瞼がぐりぐりつと感情豊かに動く。

精霊や妖精の類らしい尖った耳は、トウモロコシの房に似た金の縮れ毛から突き出しており、首を動かす直前やあくびをする時などに、当然のようにぴくぴくつと動く。

一番特徴的なのは、背中が大きく開け放たれたドレスと、背中から伸びた二対の羽根だ。

一枚一枚向こうが透けて見えるほど薄く、葉脈のような模様は何かの重要な光を走らせ、気ままにその模様をかえている。彼女が気まぐれに羽ばたくたびにその重要な何かは光の燐粉となつてぱつと飛び散った。

「挨拶のひとつぐらいほしいものだな、それとも妖精には挨拶の習

慣がないのか？」

ロブロがそう言っても、木の精霊は何故か不機嫌そうである。それもそのはず、謎の植物はすっかり大きくなって、もはや自力で運び出す事も困難になってしまっていた。

やはりあの晩のうちに運び出すべきだっただろうかなどと愚痴りつつ、ロブロに願いを込めるような眼差しで呼びかける。

「ねえ、俺、行きたい森があるんだけどさあ。いつになったら外に連れて行ってくれるの？」

マントを壁にかけたロブロは、いつそう狩人らしい前掛け姿になつて肩をすくめた。

「仕方がないだろう。魔法障壁の外は内乱が続いていて、ひどく危険な状態なんだ。ゼプスの外は今はどこも同じだ。君のような魔法植物を持って旅をしていたら、たちどころに面倒に巻き込まれてしまつのが目に見えている」

聞くところによると、押され気味だった国王軍がつい最近になつて一気に勢力を盛り返し、魔法障壁の外まで迫ってきていた反乱軍を押し返し始めたとの事だった。

ケイオン十世が一体どのような戦術を使ったのかはわからない。とにかく情勢は一向に安定しておらず、王都の外のごも安全地帯とは呼べない状態だった。

旅に出るとしても、今は困難だ。もう少し待てと、ロブロは何度も木の精霊に言い聞かせていたのだが。

「退屈で、死にそうなんですけど」

「そうか？ 木の方は楽しそうに見えるが」

「それはお前の目の錯覚、風のいたずら。木が楽しむわけ無いじゃん、バカ？」

ロブロはポット型の飲み水精製装置を傾け、じょうろに水を注いだ。公民館の備品で、魔石の力で自動的に水を溜めてゆくいわゆる魔法のポットである。

幼木はわさわさと枝葉を揺らして、はやくはやく、と新鮮な水を

催促していた。

王都には優秀な魔法使い達が開発したこのような魔法道具が沢山あり、最初は使い勝手に戸惑っていたロブロも、今ではもうすっかり手放せなくなっている。

「調子が悪いんだったら、一度フランに診てもらうかな。やっぱり一度専門家に見てもらわないと……」

などと言いつつ、さっきからずっと葉っぱの様子ばかり気にしている。シーノはきつと顔を上げると、葉っぱをばんばんと叩いた。

「植物の事なんかどうだっていい、俺が退屈で死にそうなの！一日中こんな狭いところに閉じこもっていてさ、話し相手もないんだよ！？ ありえない、もう耐えられない！ 我慢の限界、俺、木の精霊やめたい！」

「そんなむちゃくちゃだな」

「出来るもんね、ほら！」

そう言って、羽根をぴかっと光らせて力強く伸ばし、宙に浮かび上がった。眼下のロブロを指差して宣言した。

「止めても無駄だかね、俺あもつとでっかい木の守護精霊になってやる！ 最低でも樹齢百年を超えた、この公民館よりでっかい巨木だ！ そいでもって、下界であくせく働く人間どもを見下ろして、片手団扇で土地を転がしながら華麗な日々を過ごしてやる！ お前はあのポットを持って、毎朝水をやりに来い。そうすりゃ秋にはドングリくらい拾わせてやるよ！ ふーんだ、あばよ！」

シーノはくるりと宙返りして、幼木の周りにぐるぐると光の螺旋を残し、そのまま窓の向こうに消えていってしまった。

引き止めるべきかどうか一瞬迷ったが、なんせ精霊の決めたことである、彼にどうすることもできない。

仕方なく、ロブロは守護精霊がいなくなって大人しくなった幼木に水をやったのだった。

「こいつは、また変わった魔法植物だな」

夕方ごろ、ロブロは自警団本部にフランを招いていた。もちろん花屋として、木の調子を看てもらおう為である。

最初は乗り気でなかった彼も、異様な成長速度と回復力を見せる幼木に目の色を変え、打って変わって真面目な顔つきになっていた。「魔法植物というのはふつつ、育つ環境に応じて様々な魔法を身につけるんだ。人間が魔法の紋章を書くみたいに、《セルロース紋章群》という硬い細胞構造が生まれつき魔法の紋章を描いていて、それらが毒に対する抵抗力や自己治癒、あるいは生き物を不快にさせる能力をもつ魔法なんかを発動して身を護るんだ」

幼木の葉っぱになにやら電極のような専門器具を取り付けたり、いてつと身を捻る幼木の葉っぱを少し切って糊のような液体に溶かし、数種類の金属片を入れて科学反応を試したりした末に、最終的にもう一度「これは……変わった魔法植物だ」と評した。

ロブロはあまり手を出さないよう、脇で見守る事に徹していたが、どうやら検査が上手くいっておらず、やたらと時間がかかっている事は見ていて分かった。

フランは短い髪をわしわしとかいて、なぜ上手くいかないのか、といったしかめっ面で謎の植物を指差していた。

「まいった、《セルロース紋章群》がまるで見当たらない。なのに魔力があつて、回復や成長だつてしている。なんでだ？ 訳が分からないな……」

よくは分からないが、ロブロは先日から不安に思っていた事を一応聞いてみた。

「な？ 生物兵器なんかじゃないんだろ？」

フランは首を振ると、そこに存在する事をじっくり確認するように謎の幼木を指差した。

「生物兵器どころの騒ぎじゃないぞ、これは。《セルロース紋章群》を使わない《無属性種》というのは、育て方や掛け合わせによつ

て確かに生まれる事はある。

けれど、祖先由来の紋章群の痕跡のようなものが必ずどこかに残されているはずなんだ。それが、全くない。

……こいつは、魔法植物の系統樹のどの系統にも属していない、完璧な無属性。あつてはならない種、根源種、まったく、未知の種なんだ」

フランはふうむと唸って幼木とにらみ合い、幼木はふふんと誇らしげに幹をそらしていた。

手持ちぶさに傍から見ていたロボロも、少し満足げに笑った。

「そう言えばフラン、お前はただの花屋なのに、どうしてそんなに魔法植物に詳しいんだ？」

「一応、大学で魔法農学を専攻しているからな」

彼はそんなことよりも、幼木の事が気になつて仕方がない様子であつた。

「それとお前、水は何をやっている？」

「これで」

ロボロが魔法のポットを高く掲げて見せると、フランは眉をしかめた。

「清水精製装置？　ちゃんと定期検査をしているのか？」

「さあ？　公民館の備品だからな。分からない」

「長いこと使っていると魔石が水に溶けだして、微量に含まれていたりするんだが」

そう聞いて、ロボロは思わずぶつと水をふいた。

「それはまずいのか？　体に毒なのか？　死ぬのか？」

「落ち着け、そんな事は分らん。毒になるかも薬になるかも。何が起こつても不思議じゃないのが魔法というもんだ。とにかく、王都なら上水道の方がまだ安全だから……」

ちようどその時、本部のドアがノックされた。

「こんにちわ、団長さん」

香ばしいパンの香りと共に部屋に入ってきたのは、バケットを腕

に提げた茶色い髪の乙女であった。

「あら、フランさんも。こんにちわ」

フランは微笑みの光度を十倍に増しつつ、にこりと微笑みかえすと、テーブルに軽く片手を添え、十センチくらい背が高く見える不思議な魔法を発動した。

この魔法はどんな魔導書にも載っていないが、山頂に気高く咲く水仙の花を強くイメージすることで発動する花屋の奇跡なのだそうだ。

「やあ、リサさん、奇遇だなあ。パンを抱えた君は今日も一段と美しい……」

彼がもう一つ、どんな魔導書にも載っていない魔法を発動しようとしたとき、ロボロのお腹の虫が無遠慮にぎゅると鳴った。

「いかにいかに、昼食がまだだった」

「あら、ひよつとして私いいタイミングに来ましたか？」

一同は賑やかに笑った。行き場を失った微笑を浮かべつつ、フランは話を切り出した。

「ところでリサちゃん、何か用があるのか？」

「ああ、そうでした」

彼女の背後に、ちらちらと光の燐粉を飛ばしてはためく羽根のようなものが見えた。

フランはゆっくりと地上に着地し、不思議な光景に声も出せずにいる。

その傍らで、ロボロは腕を硬く結んでにらみをきかせていた。

「で？ 樹は見つかったのか？」

妖精のシーノはおずおずと顔を出した。

「……いや、この辺、大した樹がなくてさ」

「よ、よ、よ、よ………」

驚愕で顎が落ちそうになっていたフランに、リサは紹介した。

「大丈夫ですよ、危険じゃありません。ただの可愛い妖精さんですから」

「せ、精霊だつてば」

と訂正を入れるのを忘れないシーノ。その違いは一般人には理解できないが、彼女にとってはずごく重要なことのようにであった。

フランは息を殺して、目を擦ったり窓の外を見たりして、光り輝く精霊に見入っていた。

「ついでにこちらどういう精霊さままで？」

「つい先ほど公園で寂しそうに……いたたた」

シーノが恥ずかしそうにリサの髪の毛を引っ張って、リサは出会いの内容を思いつきりかつとばした。

「とにかく偶然出会ったんですよ。この方はその木の守護精霊さんだそうです」

シーノは白くなるくらい唇を噛んで、ぎゅっと拳を硬く結んでいた。ロブロは先ほど出て行く前と後で、彼女の内面に微妙な変化があったのを感じとった。

なにやら湿っぽくなってきた空気を打ち消すように、リサがぱしんと手を打った。

「そうだわ。今日はみなさんとお食事会をしましょう。人数も多いし、楽しい食事会になりそう」

最初は三名と妖精と植物ではじめたささやかなパーティーであったが、フランが途中から友達を呼んできて人数が一気に膨れ上がり、始まって間もなく騒ぎを聞きつけた近隣住民が食事を持ち寄って集まり、とても賑やかなものになった。

流しの老音楽家のアコーディオンにあわせて幼木が楽しそうに体をゆすって、フランの饒舌なトークに女性陣がうつとりと微笑み、ちやっかり姿を現したステファンがご馳走に喉を詰ませたのか、大いにむせ返っていた。

「むかしよく遊んでいた森がなくなっていて、ショックだったんで

すって」

「むかし遊んでいた森？」

「ええ、王都の外にあったみたいなの」

リサはあえて深刻な顔を作らずに微笑みながら言った。

ロブロは記憶を探ってみた。この辺りで無くなつた森と言えば、妖精が出るという噂の灰の森、鹿の隠れ家の山林、フルソマの森、過去視の泉周辺、ざっと思いつくだけでもこれだけの森が消えてしまっていた。

近年、ゼフス王国では農地を拡大するために大規模な土地改良が行われており、南西部にあった森の大部分が伐採されている。樹齢百年の木など、もうゼフスのどこにも無かつたのだ。

大小の森がいくつも焼き払われた事実を知って、非常に大きな衝撃を受けたに違いない。

ロブロは彼女の気持ち理解できて納得したと同時に、不思議にも思った。

生まれたばかりのあの木の精霊が、どうやって七年前の森で遊んでいたのだろうか？

「木の精霊ってーのは木が大地に根付くと同時にこの世に生を受けて、枯れると同時に消滅するか弱き存在なの！ だから俺様が弱いのだ！ どっちも同じくらい丁寧に扱え！」

という由の事を彼女から口すっぱく説明されていた気もするのだが……。

「精霊の世界というものは、どうも複雑な仕組みがあるみたいだ……」

リサはナイフをかちやりと置いて、とつぜん恐い顔になって言い寄った。

「そう言えば先日、お茶にお呼び致しましたのに、おいでなさいませんでしたよね？」

「あ、いや……その日は丁度……」

ロブロはぎくりと顔をこわばらせた。そういえば先日、エンシア

夫人にお茶に誘われていたのだ。

あの日は夜警のついでに夫人の屋敷にも寄ろうと思っていたのだが、獣臭い狩人の格好で食事の席に出るのはさすがにまずいか、と途中で気づき、着替えを取りに本部に戻ったのだ。

そうしたら、丁度鉢植えにシーノがいて、二匹のテントウムシと格闘していた。

それでその晩はそれどころではなくなってしまったのだ。という由の事を詳しく説明した。

リサは懸命に説明しているロブロを見て、何がおかしいのかくすくすと笑っていた。

「そんなにおかしいか？」

「忘れてしまいますよね、あんな可愛い子が突然目の前に現れたら」「あたりまえだろう、普通、妖精を目撃してしまえば、自分がおかしくなったと思わないか？」

「あら、私、小さいときから普通に遊んでますけど？」

「いやそれは普通じゃない普通じゃない」

「普通ですよ？ じゃあここにいらっしゃる皆さんに……あら、シーノさんどこに行っただのかしら？」

見ると、パーティ会場にシーノの姿だけがなかった。ロブロは嘆息をついて立ち上がった。

ロブロも森の狩人である。親しみ慣れた森がなくなる事の恐ろしさ、寂寥感を理解できないわけではない。出来ることならば、滅んでしまった森を元に戻してあげたかった。けれどもそれは一介の狩人には実現できぬ夢である。

狩人は森に住む生き物たちと同じで、森が無くなれば森と共に絶滅するしかない、今の時代には向かない希少な存在なのだ。

シーノはひとり二階の窓辺に腰掛け、物憂げに外の町並みを見つめていた。紅を含んだような空気に、家路を行く人々の賑わいが溶け込んでいた。

「私が子供のころ、父が教えてくれた民話があつてな」

大したことを言うつもりはなかった。ぐうぜんふと思い出しただけだ。

「森と大風が、双子の兄弟だという話だ。大風の神様は足を持たずに生まれて、世界との接点を持たずにさまよい続ける運命にある。森の神様は多すぎる足を持って生まれて、その場から全く動くことが出来ない運命にある。」

風の神様は動く事の出来ない弟のために、遠くの花や鳥を運んできて、森の神様は地面に立つ事が出来ない兄のために、沢山の葉を茂らせてそれらを守っているんだ。

この話の言わんとしていることはだな、要するに……」

「ねえ、煩いからちょっと黙っててくんない？」

棘のある声でシーノは言った。やはり女性には狩人の話など退屈なものかもしれない。もとより自分が話し相手に向かない事を自覚しているロブロは肩をすくめた。

「戦争が終わるまでの辛抱だ。戦争が終わりさえすれば、お前を故郷に返してやる」

「……いいよもう、帰るの面倒になつたし」

どうがんばって見ても、シーノは元気を取り戻してくれそうになかった。ロブロは諦めて、魔法のポットに水を飲みに向かった。

「気を落とすな。少なくとも、これから話し相手には困らなくなりそうだからな。フランも月に何度か往診してくれると言っていたし、明日からリサも木の面倒を見に来てくれるそうだ」

うざったそうに、不満げな目をこちらに向けてくる。その耳が嬉しそうにぱたぱたと羽ばたいたのを目ざとく見つけて、ロブロは苦笑した。

「……あのけしからん乳のお姉ちゃん？」

「なんだその言い草は」

口元を持って行きかけたグラスをぴたりととめて、ロブロは精霊を直視した。

「お前の木を心配して申し出てくれているんだからな、少しは感謝したらどうなんだ」

「へえ〜。木の事が心配なお〜？ それはどうだろうねえ〜？
なんか他に目的があるんじゃないのお〜？」

シーノは小ばかにするような笑みを浮かべて、体を前後にゆすつた。

本当は彼女が落ち込んでいるから話し相手になりたい、と言っていたのだが、プライドが傷つくだろうのでロブロはその事は言わずに我慢した。

どんなに落ち込んでいても、いたずらをする時は途端に元気になる、妖精族の本領が発揮された様子である。

「いいか、シーノ。ここは自警団本部だ。皆の好意でお前はここに居させてもらっているんだぞ。くれぐれも、悪ふざけをして市井の人たちに迷惑をかけないように。分かったな」

「あい。ところでさ、料理まだあるの？」

シーノはご機嫌に笑って、敬礼を返した。

「お前が食べる分が残らないはずはないだろ？」

「ひゃははははっ」

どうやらすっかり元の調子を取り戻したらしい、光の尾を引いてしゅるんと飛んでいってしまった。

ロブロはなんだかまともに取り合っていたのがバカらしくなってきた、肩をすくめた。妖精とまともにやりあってはならない。彼らは生まれながらにそういう種族なのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2642z/>

サンシャイン311

2011年12月11日10時46分発行